

## アフガニスタンにおける識字教育

佐 橋 謙

Literacy Education in Afghanistan

Ken SAHASHI

Generally speaking, literacy education is required in developing countries because of poverty, war and lack of understanding for literacy etc. Afghanistan is one of the typical countries under such circumstances. The author visited the country to inspect the actual literacy education for a week in August 2003. In this paper, the history and the social situation now are given very briefly, first. Then, the practical situation of the literacy education run by an NGO in Afghanistan is described. As Afghanistan is the multiracial and Moslem country, several issues that appear under those environments are discussed.

Key words : literacy education, NGO, Afghanistan  
識字教育、NGO、アフガニスタン

### 1. はじめに

本稿では、20数年間という長期間にわたって戦乱の地となったアフガニスタンでの教育復興、特に NGO による識字教育の現状を、筆者が2003年8月に機会を得た現地視察の結果並びに資料に基づいて述べ、アフガニスタンというアジアの一員でありながら日本から物理的にも、精神的にも遠く離れた国に対する教育支援のあり方を考える際の何かの参考に供したい。またそのような場所での教育復興の問題は、教育とは何か、を問い直す機会をも与えてくれる。このような観点から筆者の考えを述べたい。

戦乱の地でもっとも迷惑をこうむるのは弱者であるというのは、古今東西を問わず真理であり、弱者というのは権力から最も遠いところにいる幼少年、女性、老齢者、障害者である。そういうところでは、このような人々が当然受けるべき権利を剥奪され、無視されている。当然受けるべき権利という中には多くの項目があろうが、中でもその権利をある時期行使できな

かったために将来にわたって長期間損害を受けねばならないものは「教育を受ける権利」であろう。

アフガニスタンのような小さな国でその国土全体を覆うような戦乱が20数年にわたった、という状況のもとでは将来を担うべき若者の育成が大きな問題となる。詳しくは次節で述べるが、そのような環境下での就学率は相当低いであろうことは容易に想像できる。そのような環境のもとでは、正規のいわゆる学校教育を受けることの推進もさることながら、日常生活に最低必要な読み書きを教授する、いわゆる識字教育ができるような施設が必要となってくる。このような施設では、年齢を問わずに入学でき、またある場面では正規の学校への編入を目指した教育も必要となってくる。

筆者は冒頭で述べたように2003年8月下旬にアフガニスタンを訪れ、そのような施設および識字教育の実情を調査してきた。まず最初に背景となるアフガニスタンの歴史と現状を簡単に述べ、次に現地の教育事情を、次に識字教育の現状を述べ、最後に今後の展望を

受付 平成16年3月30日, 受理 平成16年4月15日  
近畿福祉大学 〒679 2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966 5

述べる。

なお、この報告の一部には日本国際理解教育学会の報告書<sup>1)</sup>の筆者担当部分と重複する部分があることをあらかじめお断りしておきたい。

## 2. アフガニスタンの歴史と現状

過去に遡ると、自国が戦乱の場となったという国は枚挙にいとまがない。というよりも建国以来、その国の中で戦乱が1回もなかった、という国の方が少ないであろう。そんな国はないのかも知れない。地球上で唯一「叡智」を持つと自慢するヒトがどうしてそんなに殺し合いが好きなのか、という疑問に対する答えは筆者は未だに見出せない。そのことは別にして、そのような戦乱の原因は何だったのか。過去200年くらいまでを対象に考えると、

- 1) 自国内での権力争い
- 2) 自国のイデオロギーまたは物質的権益を拡張するための侵略戦争
- 3) そのための代理戦争

などが挙げられる。上記のうち2) 3) はその戦争を仕掛けた側と仕掛けられた側との立場があるが、本報告で取り上げるアフガニスタンは、1) から3) までのすべてが原因となる戦乱を経験しており、しかも不幸なことにそれが頻繁に起こっている。

20世紀以後だけを取り上げて、1919年第3次アフガン・イギリス戦争、1929年近代化反対の内乱により国王退位、1939年第2次世界大戦（アフガンは中立宣言）、1964年新憲法制定、1973年クーデターで王制から共和制へ、1978年軍部クーデターにより人民民主党政権成立、1979年ソ連の侵攻でカルマル共産主義政権誕生、1989年ソ連撤退、以後内戦状態、1994年ころタリバン勢力を伸張、1999年タリバンが国土の90%を支配、2001年10月同時多発テロの報復と称する米英軍などの軍事行動、同年12月タリバン政権崩壊、2002年カルザイ暫定政権議長が移行政権の大統領に、という具合である。現時点でも1) の原因による戦乱の再発が懸念され、特に心配なのは1) が単独に現れるのではなく1) と3) とが複雑な形で絡み合っている様子が新聞報道などでも読み取れることである。この辺りの事情は広瀬・堀本(2002)に詳しい。

さて、筆者がアフガニスタンに入国したのは2003年8月21日。インドのデリーで飛行機乗り継ぎのための1泊が必要であったが、アフガニスタンへの出国に際しての安全審査は厳重を極めた。アフガニスタンの首都カブールの空港も荒れ果てた感じ。レストランや売店の看板は出ているが、埃が積もったまま。壁には

10ヶ国語くらいで「歓迎」という単語が大きく書かれた紙が張られていたが、半ば風に吹き破られひらひらしていたのが何かうら寂しい。空港に迎えて下さった日本ユネスコ協会連盟（日ユ協連と略）の方から、早速に地雷に対する注意や、昼間といえども一人歩きはするな、大人の女性の写真を撮ろうとするな、などを聞かされ身が引き締まる。

まずは街を一望しようということで丘の上に案内された。そこまでの途中にも連合軍の武装軍用車両とひっきりなしにすれ違う。カブールの街の中の二つの丘に登ったのだが、一方の丘には元モスクだったという建物が今は全く使われずに放棄されており、もう一方の丘の上には元王宮、内戦中には軍の司令部があったという、さぞもとは立派であったろうと思われる4、5階建ての建物がその内部が完全に破壊された状態で鉄骨と瓦礫の山になっていた。丘の上から見渡すと、首都とはいえ高層ビルは見え、せいぜい4、5階建ての建物が散らばっているのが見える。その他は日干しれんがを積んだ民家が丘の中腹までびっしりと並んでいる。街路樹も散見するがそんなに多くはない。それでも広い通りには結構たくさんの自動車が走っていた。

丘の下に降りて宿舎に向かう途中に建物のそばを通って分かったことは、丘の上から見えていた4、5階建ての建物はその殆どが2階以上は焼けており、かろうじて1階だけを修復して住居や商店にしていること、日干しれんがの住宅にも砲弾の跡が生々しくしかも無数に（写真1）残っていることであった。郊外に出ると、一見平和な田園風景も広がっているが、あちこちに戦車の残骸が放棄されていたり（写真2）、地雷の存在を示す赤ペンキを塗った石が並べられていたりした。カブールを離れる場合には、事前に国連の担当事務所に電話で安全情報を聞いてからでないとい出発できないし、街の外に出る街道筋では、時に連合軍の検問所が設けられ車を1台ずつ止めて積荷検査を受けねばならない場合もあった。また、街から100km程度も離れる場合には、銃を携行したガードマンと一緒に行動するようにという要請を受けた。

そういう環境であっても、街の市場には豊富な野菜や果物を山積みにした露店（写真3）が並び、人通りも結構多い。20年余りの戦乱を生き抜いてきた民衆のたくましさを感じた。繁華街は多くの店が開いており、日常生活に必要な物資はそう乏しいという印象はなかった。

### 3. アフガニスタンの教育事情

まず、米国陸軍省が1986年から1998年にかけて作成した国別調査報告 / 地域ハンドブックシリーズの一部が、国会図書館の連邦調査部門により出版されたもののオンライン版<sup>3)</sup>には、アフガニスタンでの教育の概要を次のように述べている。アフガニスタンでは二つの教育システムが並列して存在していて、一つはマドラサと呼ばれるイスラムの伝統的の学校でイスラムの聖典であるコーランなどを通して習慣や基礎的道德を子ども達に教えるものであり、いまのアフガニスタンの老人たちはこの種の学校が、家庭での個人的な教育を受けてきたのである。もう一つは近代的教育システムで、イスラムのやり方と近代のやり方を比べようとする伝統派の人々を納得させるために、19世紀末にとき

の政府により導入され、その後フランス、ドイツ、トルコ、インド、英国、米国、ソ連の支援によって徐々に拡張されていった。1935年に教育は普遍的で義務的かつ無料で行われるべきものとの宣言が出され、近代的教育が国民全体の思想の創造や、生産技術の向上に役立つものであり、イスラム的教育は儀式的の習慣を学習することだけに限るべき、という考えが強くなってきた。1960年代までに、発展段階を迎え技術教育の重要性が叫ばれた。その頃には政府組織が拡張され、官僚養成の要求が高まり、殆どの学校の卒業生の90%が政府に雇用されるようになった。そのとき、マドラサの卒業生は、宗教者になるか裁判官になるかのどちらかであった。ところが、1978年以來教育関係施設の破壊が相次ぎ、1996年のアフガニスタンの非識字率は男女ともアジアで第1位であった。以上が米国国会図書



写真1 首都カブールの住宅地域の破壊の跡



写真2 放置されたロシア軍戦車（カブール市郊外の道路脇）

館の資料の引用である。

もう少し詳細に現在のアフガニスタンでの初・中等教育システムをみてみよう。これはユネスコの情報<sup>4)</sup>である。義務教育は6歳から12歳まで。初等教育は6年間で、7歳から12歳まで。中学校は3年間で13歳から15歳まで。高等学校は3年間で16歳から18歳まで。中学校に入学するには入学試験を受けねばならない。中学校には卒業試験があり、高校の卒業時にも卒業試験が課せられる。

大学レベルの教育はどうか。これについてはアジア開発銀行の報告<sup>5)</sup>に詳しい。その記述から一部を引用すると次のようである。1990年代の内戦以前は、アフガニスタンの高等教育のレベルは立派なものであっ

て、ユネスコの推計によると、1990年の大学入学生はおよそ2万4千人で、そのうちの3分の1が女性であった。参考のためにその頃（アジア開発銀行の報告書では、「これは現状と言うよりも歴史的事実だ」と述べている）の主要な高等教育機関の名称と、その中に含まれていた学部名を表1に示す。ところが、アフガニスタンでの高等教育はこの20年の間にドラマティックに崩壊した。すべての主要な都市にあった設備の整った60あまりの学部が、教員も、学生も、設備もない空のキャンパスになってしまった。

このように、大学を含め正規の教育は2003年においては殆ど壊滅状態であり、例えば内海<sup>6)</sup>によればタリバン時代の小学校の総就学率は男子22%、女子3%、

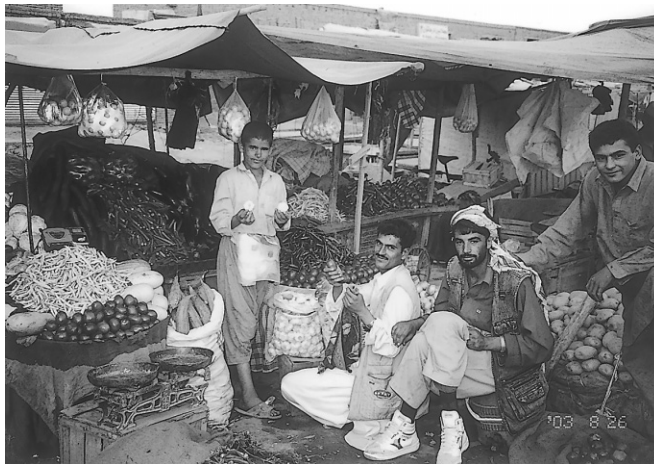


写真3 カブール市内の野菜市場

表1 高等教育機関の名称とそれらの持つ学部名

大 学 名	その大学に設置されている学部名
カブール大学	農学・経済学・教員養成・工学・芸術学・地質学・ジャーナリズム・法学・文学・自然科学・薬学・社会学・神学・獣医学
ナンガハル大学	農学・経済学・教員養成・工学・法学・文学・医学・教育学・宗教学・神学・獣医学
バルク大学	農学・経済学・法学・文学・医学・自然科学・神学
アルピロニ大学	農学・工学・法学・文学・医学・自然科学・神学
ヘラート大学	農学・芸術学・経済学・教員養成・工学・文学・医学
オマツルモメニーン大学	法学・文学・医学・自然科学・神学
カンダハル大学	農学・工学・文学・医学・神学
カブール医科大学	小児科学・予防医学・組織学
カブールポリテクニーク	構成・電気力学・鉱石と地質学
カブール師範大学	歴史学・文学・体育・自然科学

(アジア開発銀行、アフガニスタンの教育の新しい出発、2002より)

## アフガニスタンにおける識字教育

中学校で男子5～11%、女子1～2%ということである。施設面から言っても2002年8月に発表された「アフガニスタンの教育の修復と開発」<sup>7)</sup>によると、新設しなければならない学校が2500校、大幅な修復を要する学校が3525校、中程度の修復を要する学校が873校、小規模修理が665校必要ということになっている。現状では例えば写真4に示すように、校舎不足を補うためのテント校舎を使用している。校舎と言ってもテントが張って小さな黒板があるだけで、子ども達は地面に敷いたシートの上に座って授業を受けている。さらに、すべての学校に安全な水とトイレが必要であると述べており、このようなことが書かれているということは、いままでの学校にはそのような施設がなかったということの意味しており、当該国の衛生状態や貧窮の度合いが推察される。

### 4. アフガニスタンの識字教育

#### 4-1 なぜ識字教育か

前節で述べたようなここ数十年の間に起こった事情の他に、アフガニスタンでの学校教育の困難さについていくつかの原因を指摘できる。まずは地理的状況の問題である。すなわち面積は日本の約1.5倍であるのに人口は約1割程度の希薄さ、さらには山岳地域や沙漠が多い、ということが国の中の多くの地域に元来近くに学校がなかったという問題を生み出している。数少ない都会地では比較的の学校に通いやすいが、人口の約1割といわれている遊牧民はもちろん、農村部、山間部に住んでいる人々に対する教育の機会というのは極めて少ない。第2にそれに拍車をかけるのが貧困である。生活のための経費が子どもの教育費を含めて親の収入で十分賄える場合には問題ないが、そうでない

場合には学齢期の子どもにも何らかの収入を得させる仕事をさせざるを得ないとか、積極的に仕事をさせなくても教育費を払えないために学校に行かせないということになる。

このような事情は、多分、アフガニスタンであっても自給自足の生活でみんながそれなりに満足していた時にはそれでも良かったに違いない。ある閉じた地域内である限られた人々だけで生活が継続して成立し得るような場合である。しかし、現時点ではよほど特殊な状況を仮定しない限りそのような閉じた空間での生活というのは考えられない。道路交通網が発達し、通信手段が多様化すると、外部との交渉が必須である。そうなったとき、文字を知っているかいないかの違いは大きい。文字を知らない側の不利益は計り知れない。このような不平等はあってはならないという考えが識字運動の基本的考えである。

ここで、アフガニスタンでの識字率を各種の調査に基づいて年代別に表2に示そう。ただし、前掲の報告



写真4 テントで授業の小学校（カブール市内）

表2 識字率(%)の暦年による変化

出典	注(1)			注(2)	注(3)	注(4)	
	戦前 1979年以前	1990年前後		1993年	1990年	1999年	2001年
年齢		6才以上			15才以上		
地域		都市部	郊外				
全員	11.4	25.9	8.8	29.8	29	36	36
男性	18.7	35.5	15.7	45.2	44	51	51
女性	2.8	14.8	0.6	13.5	14	21	21

注(1) 引用文献3)

注(2) <http://www.afghanistan.com>

注(3) <http://www.cia.gov/> The World Fact book.

注(4) World Bank : Fact at a glance.

書<sup>3</sup>)にも、識字率の統計については1978年以後はよほど注意をして使わねばならない、としていることに留意する必要がある。因みに旧ソ連がアフガニスタンに侵攻したのは1979年である。表中の「戦前」とあるのはこの数字はこの報告書からの引用であるから1979年よりは前と理解できよう。また、表中に「現在」とあるのはこの表が作られたのが1986年から1998年の間であり、さらにその報告書<sup>3</sup>)に1993年の調査結果が出ているから、ソ連撤退(1989)後ムジャヒディンが政権を取るまでの間のどこか、1990年の前後であろう。結局、アフガニスタン全体の識字率は1980年頃の約11%から、1990年頃の30%、さらに2000年頃の36%というように着実に増加はしているが、都市部と遠隔地との差は今でも多分表2とそんなに変わっていないであろう。

表2は、識字教育は郊外はもちろん都市部でも欠かすことは出来ないことを明確に示している。文字を知らない人々に文字を知って貰おうとするのは、その人々が生活するのに文字を知っている人々との間に生ずるであろう差別を無くすためであるから、識字運動あるいは識字教育というのは必ずしも文字を教えるだけではなく、生活に必要な基本的知識ということで算術も含むのが普通である。日本語でいうところの「読み書きそろばん」である。さらに運動が深化すると、読み書きそろばんだけでなくいわゆる職業訓練の内容を含んでいく。収入を得るための基礎としての識字から、実際に収入を得る道を歩むための直接的な教育に発展していく。

#### 4 - 2 識字教育とNGO

1990年以降の国連主導のEducation for All運動は公的初級学校への子どもの回帰を重点にしており、また、2002年からのユニセフのBack to School Campaignも、崩壊した小・中学校の再開を目指したものであり、大人の非識字者は考慮の対象ではなく、いわゆる識字教育を主体とするものではなかった。このような公的教育制度の復旧が重要であることはもちろんであるが、前節で述べたような識字教育の浸透もまた重要である。千葉(2001)<sup>9</sup>)が指摘するように、親の非識字が子どもの不登校やドロップアウトを導き、女子、母親の非識字が、家庭生活、子どもの養育の改善を遅らせていることを考えると、なおさら緊急課題として識字教育が取り上げられねばならない。

公的教育の復旧は、当然のことながら当該国政府機関が主導権を持って行われるべきものであり、支援は他国から受けたとしても主体的に動くのはその国の政府である。ところが、そうであるために、アフガニ

スタンのような状況下にある国の政府は公的教育施設の復旧だけでも財政的にも技術的にも精一杯の努力を傾けてもまだ不足といった状況が多く、公的教育とは見なされていない識字教育施設の再建、あるいは新設には手が回らないのが実情で、これはアフガニスタンだけの現実ではなく、戦乱や貧困を経験した途上国では普通の状態である。そこで力を発揮するのが各国の非政府組織であるNGOである。アフガニスタンに対する日本のNGOの対応は、2001年12月に開催されたアフガニスタン復興NGO東京会議でその大枠が総合アピール<sup>9</sup>)として発表され、さらに分野別分科会アピールの教育関係で、日本のNGOとアフガニスタンのNGOの密接な協力、遠隔地教育の重視、包括的教育プログラムの設定(この中に成人・青年に対する識字教育が含まれている)など支援のあるべき姿と共に12項目にわたる広範な支援内容が明らかにされた。

日本では日コ協連(日本ユネスコ協会連盟の略)が10数年前から途上国での識字運動を展開しており、「寺子屋運動」と名付けている。その名の由来はもちろん江戸時代の寺子屋だが、江戸時代には多くの藩に藩校と称する教育機関が設けられていた。これらは専ら武家の子弟の教育のためのものであって、特別なもの以外は農・工・商の子弟はそのそこで学ぶ権利を持たなかった。そこでお寺や豪商の邸の一部を解放して農・工・商の子弟の希望者に「読み書きそろばん」を教えたのが寺子屋である。つまり、寺子屋は官のものではなく民のものであり、庶民の期待に応じて設立されたものであった。そのことが、ユネスコの考える識字運動の精神と似ているということで「寺子屋運動」と呼ばれたのである。但し違うところがあり、江戸時代の寺子屋はあくまで子弟のためのものであったが、



写真5 表敬したアフガニスタン教育省副大臣(左は筆者)

現在途上国で展開されている寺子屋は年齢を問わない。要するに識字教育が必要と認められ、本人が希望するならば年齢によらずそこで学べるのである。なお、寺子屋の英訳は Community Learning Center である。

アフガニスタンで識字教育に携わっている NGO は日ユ協連だけではない。少し情報が古いが2002年10月現在の日本外務省の資料<sup>10)</sup>によれば、日本の NGO は20団体以上がアフガニスタンで難民定住促進、教育、医療などの分野で活動中とあり、筆者の知る限りではユネスコの他、ユニセフ、セーブザチルドレンジャパン、ジャパンエマージェンシー NGOs (JEN)、ワールドビジョンジャパンなどが識字運動をアフガニスタンで展開している。実際今回の訪問に際してアフガニスタン教育省のカリク副大臣を表敬したとき(写真5)にも、日本からの NGO の援助について多大の感謝の言葉が述べられた。

#### 4 - 3 寺子屋の具体例

ここでは筆者らが実際に訪れた日ユ協連がアフガニスタンで実行している寺子屋運動を紹介する。以下の文では筆者らの現地で得た情報<sup>11)</sup>の他、本文末の引用文献<sup>12) - 20)</sup>を参考にしていく。

日ユ協連の事務所がカブールに設置されたのは2002年11月のことであるが、日ユ協連がアフガニスタンの教育支援に本格的に取り組み始めたのはそれ以前からである。例えば、難民としてパキスタンに逃れキャンプ生活を送っていたアフガニスタンの人々を対象とした寺子屋は、2002年1月までに10教室に達し、460人の受講生を集めていた実績がある。

日ユ協連がアフガニスタン国内で最初に寺子屋を開設したのは、カブールから北へ約60kmのイスタリフ村で、そこは世帯数5800、人口28000人といわれ、ヒ

ンズークシ山脈の南麓のオアシスにある。平和な時代には葡萄の産地あるいは別荘地として栄えた村だということだったが、内戦時代に北部同盟とタリバンが衝突した激戦地となつてしまい、殆どの家屋は破壊され銃弾の跡が生々しかった。寺子屋建設地としてイスタリフ村と決め、さらにその中の現在地であると決めるについては、土地の長老、軍閥の司令官などとの交渉が大変だったそうである。結局決まった場所は、内戦時代には北部同盟のマスード将軍の司令部があった近くで、ヘリポートがあったという小高い丘の上であった。従って眺望は大変いいが、水にはやや不自由という場所である(写真6、写真7)。写真6は水のある場所から丘の上の寺子屋を見上げたところ。写真7は写真6の左下の看板の大写しである。

校舎から約30m離れた所に水飲み場、さらに30mほど離れてトイレが作られている。水飲み場で水を出すためには、標高差で10mある下の用水路から水を運ばねばならないし、トイレは汲み取り式ではあるが、これらの設備があることはアフガニスタンの田舎の学校としては珍しい。

寺子屋の完成は2002年12月で、建設に際しては「できることはあなた方で……」ということで資材の費用は日ユ協連が負担するが、労働力は地元の人々の提供というやり方で進められた。これは、そうする方がこの寺子屋は自分たちの物なのだという考えが浸透するだろうとの配慮があつてのことだそうだ。完成した寺子屋は20人がゆっくり机の前に座れる教室が2部屋、職員室とでもいう部屋が一つ、合計3部屋のこじんまりした建物である。上述の職員室とでもいう部屋は、実際には多用途に使われている。部屋の床には絨毯が敷き詰められ、壁沿いにはクッションが並べられていて、片隅にはポットやコップがあつてお茶が飲



写真6 日ユ協連の建設した識字教室 寺子屋 (右上の木立の間に見える建物)

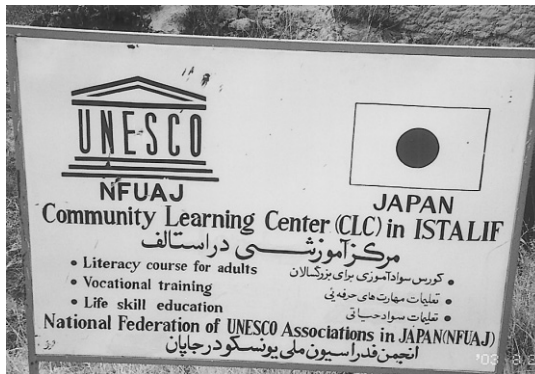


写真7 寺子屋であることを示す看板(写真6の左下のもの)

める用意も整っている。そこでは、教員同士の打合せはもちろん、日コ協連の職員との話し合い、地域住民や生徒と日コ協連職員との交流などにも用いられ、大変重要な役目を果たしているようである。

完成した寺子屋では地元長老の要望で、家族を扶養しなければならない成人男子を対象とする識字教育が、2003年4月から始められた。筆者が訪れた時期には、成人と言うよりもっと若い世代の子ども達も授業を受けていた。授業は8時～10時、10時半～12時半に各1クラスずつ、14時～16時が2クラス同時に一日計4クラスの授業がある。この村には電気が来ていないので、夜には授業はできない。週休1日制でイスラムの休日である金曜日以外は毎日開校している。この寺子屋の登録生徒数は約100人。出席者数は1クラス20人で経過している。上述のように4クラスあるのだから20人程度がいつも欠席しているということになる。生徒の年齢は14才から60才まで。葡萄栽培を主とする農家が多いこともあって、収入向上のための職業教育の必要性も近い将来の問題として考えられている。さらに、収入向上に関連して生徒の中に英会話に対する関心が高く、実際に希望者に週1回のペースでカブールから打合せなどのために訪問する日コ協連の職員が先生になって英会話の指導も行われている。

この寺子屋の補助的な役割として、公立学校に通っている子ども達に対して塾的な役割も果たしていた。公立学校の先生の数が十分でなく、休講が多いなどのためにこの校舎を利用することもあるということであった。

教員は4名で、2人はカブールの公立中学校から派遣されており、あとの2人は中学校教育はうけているが教員資格は持っていないという人だった。この教員たちの給与は日コ協連は負担せず、アフガニスタン教育省が支払っている。その額は内海<sup>9)</sup>によると月額で

\$30～40で、カブールでの平均最低生活費\$140と比べてずっと低い。教育の重要性を考えると、教員の社会的地位の向上、教員の質の向上のためには給与の増額が望まれるところである。ついでに述べると、このような寺子屋の建設費は約\$200、机・椅子(2～3人掛け)1組約\$30、地元雇用の運転手の月額給与約\$400、英語の喋れる運転手で同\$800ということであった。

写真8は、イスタリフの寺子屋で識字教育を受けている生徒達で休憩時間中であつたが、彼等の表情は明るく、人なつっこい屈託のない笑顔が微笑ましい。

以上は、イスタリフ村での男性のための識字教育の実情である。女性に対してはどうか。以下は男性である筆者は立ち入れなかった女性教室について、前掲報告書<sup>1)</sup>から同行した女性のレポートの一部を引用する。アフガニスタンでは女性教育は元来無視されることが多く、特に1990年代後半のタリバン時代には無視というより禁止されていた。イスタリフ村では寺子屋建設の最初の頃は上述のように、家族を扶養しなければならない成人男子を対象とするということ識字教育が始まったが、それが軌道に乗るにつれ「教師が女性ならば、夫の了解は得られる、読み書きそろばん以外にも洋裁、編み物などなんでも学びたい」というような女性側からの積極的な意見が出され、筆者らが訪問した直前の2003年7月13日から女性向き寺子屋も発足した。写真9は、この寺子屋で学ぶ生徒たちである。見られるように子ども連れでもOKである。

建物はもともとあつた住居の一部を地元から提供して貰い、1クラスのみで登録人員は約40人であるが、定常的に出席するのはその約半数ということである。授業時間は14時から16時、生徒の年齢は18才から60才、識字教育の対象言語は男性寺子屋と同じダリ語。教員は近くに女性での適任者が得られなかったので、



写真8 識字学校の生徒たち(年齢は10代～30代)



写真9 女性向き識字学校の生徒たち(撮影は長浦紀華氏)



教育省の推薦でカブールの中学校の現職教員を雇っているとのことである。生徒たちの意見としては、ここに来るのは大変楽しい、幸せだ、識字以外に職業教育も受けたい、いままでイランにいる夫から手紙が来ても返事も出せなかったが、これからは返事が書けるのでとても嬉しい、というように大変好評であった。

#### 4 - 4 識字教育用教科書

これらの識字教育にはどのような教科書が使われているのであろうか。現在アフガニスタンの識字教育で一般的に使われているのは、ダリ語とパシュトゥ語の二通りでそれぞれ全3巻である。1巻を修了するのは、約3ヶ月を標準としている。また、3巻を修了すると、公立の小学校の3年生と同じ能力を持てるように設計されており、3巻を修了することにより非識字者から公式に「識字者」と認められるようになる。

筆者は現地でパシュトゥ語の第3冊目の教科書入手し、持ち帰ることができた。その序文と目次の日本語訳を在日アフガニスタン大使館バシル モハバット領事に依頼したところ、気持ちよく依頼に応じて頂いたので以下に示す。

——（以下識字教科書の序文と目次の日本語訳）——  
序 文

このシリーズの第一冊目では文字と数学の基本を勉強しました。第二冊目は言葉と数学の応用編となっています。第三冊目では日常を含めた社会生活全般について学習し、それによって新聞や雑誌などの内容がより深く理解できるようになります。生活や人生の質を高めることを目標としています。本は人生に役立つ知識をもたらし、読む楽しさを教え、友人に手紙を書くことができるようになるなど、日常生活を有意義なものにします。三冊目までのコースを勉強し、もしやさしすぎると感じた学習者には、レベルに合わせた別のコースも用意しています。勉強を通して国や社会のために役立つ人間になりましょう。

#### 目 次

1. 教育
2. 平和・友好・共存
3. アフガニスタンの国名の移り変わり
4. 仕事と努力
5. ばい菌
6. 保健
7. 家庭の衛生
8. 環境衛生
9. 栄養
10. 栄養不足・子どもへの影響

11. 野菜の種類
12. 新鮮な野菜
13. 水
14. 麻薬
15. 気候
16. 気候・日常生活への影響
17. 農業と経済の関係
18. 近代的農機具の使い方
19. 土地を耕す
20. 肥沃な土壌
21. 農薬
22. 農薬の効果
23. 雑草の悪影響
24. 雑草駆除
25. 農業と園芸
26. 経済と動物の関係
27. 手工業から機械工業へ
28. 社会における労働者の役割
29. 瞑想
30. 金曜日の礼拝
31. イード（祭り）
32. 死者への礼拝
33. 周囲の人々との助け合い
34. 周囲の人々への尊敬
35. 社会での助け合い

——（ここまで識字教科書の序文と目次の日本語訳）——

我々は1冊目、2冊目の内容については全く知らないのだが、3冊目の序文によってその概略を知ることができる。すなわち、2冊目まででダリ語またはパシュトゥ語による「読み書きそろばん」の基礎を修得し、3冊目の応用編で新聞・雑誌をしっかりと読めるようになる土台作りを済ませようということだ。また、この序文によれば第3冊目以後のテキストの存在も窺えるが、その存在を確認することは出来なかった。さらに、持ち帰った3冊目の教科書は230頁近くあるが、この目次では144頁までしかない。これは、145頁以後は数学の内容で頁数が別立てになっているためである。145頁以後に書いてあるのは、数学あるいは算数といっても良い内容である。教科書に現れる順序で、引き算、足し算、かけ算、わり算、簡単な図形、長さを計る、角度、三角形、四辺形、円、分数、重さを計る、時間を計るなどである。

1頁から144頁までの内容は、教科書の順に基本事項（16：この数字はその項目に費やされた頁数を示す、以下同様）、保健衛生<sup>(16)</sup>、食物<sup>(25)</sup>、気候<sup>(8)</sup>、農業

③4、経済<sup>12</sup>、宗教<sup>17</sup>、道徳<sup>9</sup>となっており、農業の關係に最も多くの頁が割かれ次が食物であるというのは、現在アフガニスタンが直面している問題点あるいは解決すべき問題点を示しているであろう。各節（目次の項目）毎の頁数をみると、やはり農業関係の「土地を耕す」「肥沃な土壌」がそれぞれ6頁で最も多い。次いで多い（5頁）のが「教育」「栄養不足・子どもへの影響」「雑草の悪影響」「雑草駆除」「イード（祭り）」「死者への礼拝」と続いている。

この本の序文で「第3冊目では日常を含めた社会生活全般について学習し、それによって新聞や雑誌などの内容がより深く理解できるようになります」とあるが、教科書の目次を見た限りでは政治的な内容に関することは、国内、国際を問わず殆ど取り上げられていないようだ。識字教育の対象が、必ずしも初等教育を受ける年齢層だけではないことを考えると、アフガニスタンの将来にとってこの教科書にも多少の政治的内容、例えばアフガニスタン自身がこれが良いと信じる政治形態などの記載があっても良いのではなかろうかとも思えるが、それは外国人だから言えることであって、その議論は棚上げにしておかないと教科書など作れないのかも知れない。

今回の訪問で初めて紹介されたことであるが、教育省識字局では特に女性用の識字教科書の編纂が進められているとのことであった。ユネスコやユニセフの協力のもとにダリ語とパシュトゥ語の2カ国語で出版される予定であり、編集のためには、これらの2カ国語がそれぞれ分かる教員から成る2チームが編成され、内容としては、子ども達のケア、家族問題、環境問題、衛生問題、平和問題などが含まれていることなどの説明を受けた。本が一応出来上がったら、一般の学校に配布する前にどこかの実験学校で試行する予定で、その後改訂を加え、一般の学校で広く使う予定であるとのことであった。これらの内容のもう少し詳細なことは佐橋<sup>21</sup>を参照されたい。

## 5. おわりに

アフガニスタンという古くから多様な文化の華が開いていたにも関わらず、近代・現代になってから長期の戦乱に見舞われた国、しかも日本と比べ面積は1.7倍であるのに人口は10分の1ということで人口密度が希薄で、かつ多民族国家、さらにはイスラムという宗教を国家存立の基盤とするという我々日本人にとってなじみの薄い国家体制という環境のもとでの教育の特殊性、中でも公的教育を受ける機会に恵まれない人々に対する識字教育の現状を述べてきた。ここで識字教

育が行われるのが多民族国家であることと、イスラムの国においてであるという2つの問題を考えてみたい。

前者については、識字教育を考えようとするとき一体どの民族の言葉を教えるべきかという問題がある。多民族国家と言ってもそれで一国を形成しているのだから、一つまたは幾つかの公用語が決められているはずだ。従ってその公用語を教えれば良いという大変分かりやすい議論がある。分かりやすくはあっても、本当にそれでよいのか。言語というものはその民族のアイデンティティを示すものの一つであり、またその民族が営々と築き上げてきた固有の文化の基盤でもあるからである。筆者は2001年11月にベトナム北部の中国との国境近くの識字教育の現場を訪れた（岡山ユネスコ協会<sup>22</sup>）。ベトナムも多民族国家であり、特に我々が訪問した地域は多くの少数民族が混在している地域であった。そこでも日本のNGO（日コ協連）が識字教育活動を行っていたが、対象言語はそれぞれの民族の言葉ではなく、ベトナムの公用語であるベトナム語を教えていた。つまり、それぞれの民族の固有の言語が失われてしまわないかという心配をせざるを得ない状況であった。さらに、筆者の以前のオーストラリアでの経験<sup>23</sup>では、北部準州のアリスプリングスから約100kmのジェイクリーク部落の学校が、アボリジニの老人たちの学校破壊から守るために鉄条網で校舎が囲まれているのを見た。そこでは白人たちが、アボリジニの子弟にアボリジニの言葉ではなく、英語での教育を行っていたのである。老人たちは自分たちの文化が破壊され、無視されることを恐れたために学校を襲撃することがあったのだ。

識字教育を施す側の立場では、何が非識字者にとって利益になるのかを考えるのは当然であるが、その利益として伝承文化の保護をとるのか、現世的な利益（現金収入）をとるのか、が問題の別れ道である。本稿4 - 3節で述べたように、アフガニスタンのイスタリフの寺子屋で英語を学びたいという非識字者の希望があることを紹介したが、これもまさに現在のアフガニスタンの状況に照らすと就職に有利に違いないとの考えがあるからである。4 - 3節で述べた自動車の運転手の場合、英語が喋れるかどうかで給与が倍も違うのだ。このことは識字教育に限ったことではなく、教育全般に通じることでもある。教育とは何のためにあるのか、古い文化の伝承と新しい知識・技術の創造のためとされている。通常の教育では、両者が並行して行われる。ところが識字教育のような場面では、結果がなるべく早く現れる行為をしがちである。並行では

なくて一方が優先され勝ちで、文化保護は後回しで現世利益追求が優先されることが多い。やむを得ない点もあるが、長期間の展望を考えると、果たしてそれで良いのかという反省は常に必要だし、それは非識字者の側よりも識字教育を与える側が慎重に検討すべき問題だと思う。西欧主導のグローバル化が進行する中、たださえ文化の多様性が失われようとしている。それを加速するような識字教育は果たして人間の文化を破壊することにならないか。大いに気になる点である。

次に、識字教育が行われるのがイスラムの国であることの問題について述べたい。我々日本人にとってイスラムの国々は比較的遠い存在である。地理的に遠いばかりでなく、イスラム文化が西欧経由で日本に伝えられたことに原因があるとされている<sup>24)</sup>。従って、何かと誤解されている点も多い。著名な1例に、イスラムの聖典であるコーランの記述に「イスラムでは4人まで妻をめとることができる」というのがある。これだけを抜き出して読むと、とんでもないことのように思えるが、その前後のコーランの記述を2つの日本語訳に従って引用すると、「もし汝ら（自分だけでは）孤児に公正にしてやれそうにもないと思ったら、誰か気に入った女をめとるがよい、二人なり、三人なり、四人なり。だがもし（妻が多くては）公平にできないようならば一人だけにしておくか、さもなくばお前たちの右手が所有しているもの（女奴隷を指す）だけで我慢しておけ」（以上井筒<sup>25)</sup>、括弧内は原著者の註）。また「なんじらがもし孤児の女たちに対し、公正になり得ない恐れがあるならば（孤独の女たちがなんじの保護の本にある場合、その財産や結婚上の利益や権利を侵害する恐れあること）なんじらがよいと思う、ふたりまたは三人または四人の女をめとれ（オホドの戦役において、七百人のムスリム軍の中から七十四名の戦死者を出し、多くの孤児と寡婦の救済は、当時の社会では至難の問題であった。そこで本節のように啓示されたわけで、一般にイスラームの多妻につき、本節に述べられる前段と後段の条件が無視されているのは遺憾である。イスラームの精神は、この文面からも明らかなように一夫一婦で、またムスリム社会の現実も大体そうである）。しかし公平に遇し得ないおそれがあれば、ただひとりだけめとるか、またはなんじらの右手が所有する者をめとれ」（以上三田<sup>26)</sup>、括弧内は原著者の註）とある。つまり、誰でもが4人まで妻を持って良い訳ではなく、戦時の孤児または寡婦救済のための便法なのである。

このような日本人の誤解が多くあるにせよ、現実の

問題としてイスタリフで筆者が見聞したこととして次のようなことがあった。男女共学は考えられないこと。男子の使った教室は、たとえ空いていても女子の教室としては使えないこと。女子のクラスの教員は女性に限ること、などである。これらはたださえ物質的、人的資源が乏しいとき、識字教育を実施するのに非能率的と思わざるを得ない。ブルカ着用についてはカブールの街では多く見かけたが、イスタリフでは殆ど見なかった。特に写真でも見られるように、寺子屋内では頭髪部を覆うスカーフの着用は全員に見られるが顔面も覆うブルカの着用は見られない。

これらの問題は日本では男女差別の現れとして捉えられている。男女に差があるのか、あるいは差を付けるのか、という問題は上述の何人まで娶って良いのかという問題よりもさらに深刻であると筆者は思う。なぜなら、再びコーランに次のような記述があるからである。「アッラーはもともと男と（女）との間には優劣をおつけになったのだし、また（生活に必要な）金は男が出すのだから、この点で男の方が女の上立つべきもの」（以上の井筒<sup>27)</sup>括弧内は原著者の註）とある。つまり、イスラムを信じる人々の基本的考えに「もともと優劣がある」ということが浸透しており、またそれはイスラムの文化であるとも考えられよう。ところが一方、1967年の国連総会での「男女差別撤廃宣言」では「男子との権利の平等を實際上、否定または制限する婦人に対する差別は、基本的に不正であり、人間の尊厳に対する侵犯である」と述べられている。1967年の宣言採択の時、モスレムの人々はどのような対応をしたのかは筆者は知らないが、このような対立点があることを知っていないと真の国際理解は生まれないだろう。

以上、多民族国家における識字教育と、イスラム国家での識字教育での男女差別、という2つの問題点を提起したが、これら2つとも伝統文化の保持をどうするかという共通項を持っている。最近の比較文化論の立場からは、文化というのは優劣を比べられる対象ではなく、いずれの文化も尊重されねばならないというのが一般的である。また、2000年来の過去を持つ中東での厳しい対立も、そのような文化の対立・衝突のように見えてくる。

地球上の生命体の中で、ヒトは唯一叡智を持った生命だと自負している。その叡智でこのような対立を一刻も早く解消出来る道を見付けることができれば、アフガニスタンでの諸問題も世界平和達成のための礎としての役割を果たせたことになるだろう。

謝辞：日本国際理解教育学会主催のアフガニスタンスタディーツアーに参加を認めて頂いた学会長でもあり、ツアーの団長でもあった国際基督教大学の千葉泉弘教授に深甚なる謝意を捧げねばならない。現地で状況を詳しく説明して頂いた日ユ協連カプール事務所長の松本幸敏氏、同所の現地職員ヤマ氏の協力無しにはこの報告は出来なかった。多忙な時間を割いてパシュトゥ語の識字教科書の一部の日本語訳を作って頂いた在日アフガニスタン大使館のパシール モハバット領事にも感謝を捧げる。

### 引用文献

- 1) 千葉泉弘編：2003年スタディーツアー報告書 アフガニスタン．日本国際理解教育学会国際委員会、スタディーツアー報告書、1 - 66、2004．
- 2) 広瀬崇子、堀本武功編著：アフガニスタン——南西アジア事情を読み解く．(株)明石書店、1 - 260、2002
- 3) U. S. Library of Congress. Country Studies. Afghanistan, [http : //countrystudies.us/](http://countrystudies.us/). 1986-1998.
- 4) NESCO: Higher Education System Database, International Association of Universities / UNESCO International Centre on Higher Education, [http : //www.unesco.org/iau/cd-data/af.rtf](http://www.unesco.org/iau/cd-data/af.rtf). 2002.
- 5) Asian Development Bank: A new Start for Afghanistan's Education Sector. South Asia Development, Asian Development Bank, April, 12-13, 2003.
- 6) 内海成治：アフガニスタンの教育復興支援を考える．広島大学教育開発国際協力研究センター『国際教育協力論集』第5巻第2号、3、2002．
- 7) Government of Afghanistan, Ministry of Education: Policy for the Rehabilitation and Development of Education in Afghanistan. Directorate of Minister's Office.
- 8) 千葉泉弘：「なぜ識字か」第2版発刊に寄せて．  
[http : //subsite.icu.ac.jp/org/liteken/act\\_atcl.html](http://subsite.icu.ac.jp/org/liteken/act_atcl.html)
- 9) [http : //www.japanplatform.org/gallery/photo/kaigi.html#sougou](http://www.japanplatform.org/gallery/photo/kaigi.html#sougou)
- 10) [http : //www.mofa.go.jp/mofaj/area/afghanistan/afs\\_package\\_0210.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/afghanistan/afs_package_0210.html)
- 11) 佐橋 謙：日本ユネスコ協会連盟の世界寺子屋運動の現場見学．日本国際理解教育学会国際委員会、スタディーツアー報告書、29 - 36、2004．
- 12) [http : //www.unesco.jp/topics/ae020207.pdf](http://www.unesco.jp/topics/ae020207.pdf)
- 13) [http : //www.unesco.jp/topics/ae020524.pdf](http://www.unesco.jp/topics/ae020524.pdf)
- 14) [http : //www.unesco.jp/topics/ae021225.pdf](http://www.unesco.jp/topics/ae021225.pdf)
- 15) [http : //www.unesco.jp/topics/afgan-matsumoto.PDF](http://www.unesco.jp/topics/afgan-matsumoto.PDF)
- 16) [http : //www.unesco.jp/topics/afgan030509.pdf](http://www.unesco.jp/topics/afgan030509.pdf)
- 17) [http : //www.unesco.jp/topics/afgan040109.pdf](http://www.unesco.jp/topics/afgan040109.pdf)
- 18) [http : //www.unesco.jp/topics/afgan2.pdf](http://www.unesco.jp/topics/afgan2.pdf)
- 19) [http : //www.unesco.or.jp/contents/tera/contents/tr2002/tr02j-nanmin.pdf](http://www.unesco.or.jp/contents/tera/contents/tr2002/tr02j-nanmin.pdf)
- 20) [http : //www.unesco.or.jp/contents/tera/contents/tr2003/tr03j-afghan.pdf](http://www.unesco.or.jp/contents/tera/contents/tr2003/tr03j-afghan.pdf)
- 21) 佐橋 謙：女性向き識字教育用の新教科書の開発．日本国際理解教育学会国際委員会、スタディーツアー報告書、23 - 28、2004．
- 22) 岡山ユネスコ協会：ベトナムスタディーツアー報告書．1 - 51、2001．
- 23) 佐橋 謙：オーストラリア原住民の教育(第一部)．岡山大学教育学部研究集録、No 69、125 - 135、1985．
- 24) 蒲生礼一：イスラーム．岩波新書、2 - 7、1999．
- 25) 井筒俊彦：コーラン(上)．岩波文庫、108 - 109、2003．
- 26) 三田了一：日訳・注解 聖クラーン．ムスリム世界連盟、82 - 83、1973．
- 27) 井筒俊彦：コーラン(上)．岩波文庫、115、2003．